

多谷 昇太

「わ、わたし、わたし：駅を知りたいだけです。あの……こんな汚い格好してるけど……どうか教えてください。わたしは家に帰りたい」そう訴えかける目は涙ぐんでさえいる。それを聞きながらしかし俺にはこのオブラートに包まれたような自分の姿を彼女が自覚しているのかどうか、まずそれが疑われた。と云うのも（いま居るこの夢世界？ or 異世界？ ゆえに）彼女から直接的に伝わり来る思念が容易に理解されたからだ。それはあのと時魔王に絡め取られたイブが最後に送つてよこした念を俺が理解できたのとまったく同じ理屈である。それに寄ればだが、この眼前のホームレス然とした女性の心中では「わたしがこんな乞食のような格好をしているから人々から冷たくされる、嫌われてしまう。お金をたかられると勘違いされているのだ」という思いが渦巻いているのだ。あきらかに自身のオブラート姿など自覚していない。これはあとから気づいたことだが実はこのオブラート姿こそが、この「悪霊世界、悪霊の街」の住人たちの目に写る姿となるのだろう。すなわち彼らにとって理解不能、悪意や

欺瞞に充ちた自分たちの類ではないがゆえにそう写るのだ。魔王の仕儀とは云えこの世界に落とされた俺にあつても同様だったが、しかしオブラートの中から伝わり来る必死さと、何某か純粹なもの感得し得たのだし、何よりそれを破いて見せ得たのである。おそらく、この老女の云う「家」とは現実のそれではないだろう（なぜならホームレスだから）。それはたぶんホーム、心の故郷のことなのに違いない。

以上を見取った俺はまわりの嘲笑など歯牙にもかけず彼女をやさしく立ち上がらせると「はい、わかりました。では僕がご案内します。さあ、行きましょう、駅に」と云つて老女と連れ立って歩き始めた。俺に襲いかかっていた連中がなぜか退いて道を開ける。だが幾許もなく俺自身がその駅を最前より見出せなかったことを思い出した。しまったと思つたがしかしこの瞬間にか暖かいものが2人に降りて来たように感ぜられ、なんと、いきなり目の前に鶴見駅が現出したのだ。安堵した俺は「ほらここですよ。よかったですねえ」と老女に語りかけた。それへ、まるで天国行き駅の駅舎と電車を見出したかのような感激の涙を流しながら必要以上に老女が礼を述べる。「ありがとうございます。ありがとうございます」を繰り返しながら俺

の手を両手で握ったがその瞬間手にしていた小銭を地面にバラまいてしまった。俺はすばやくかがんでそれを拾うのだがその際あることを思いつく。拾い終った小銭を彼女に手渡しながら「こんなけったくそ悪いところ、さつさと離れた方がいいですよ」とはなむけの言葉を送ったあとで、言葉のみならず右手をズボンのうしろポケットにまわして財布を取り出し、賤別を渡そうとしたのだ。しかしこの時危惧が走った。『待てよ。

俺は確か家に帰って着替えを：背広やシャツをハンガーラックに放り投げて、そのあと財布をズボンから抜き取ったんだっけ？』と。さらに『そのあと確かイブが：ん？イブ？イブって：？』脈路なく現実がつながろうとしているようだ。「ちっ」という舌打ちがまわりでし否応ない、もの凄いな念力で一気に俺をこの悪霊世界から連れ去るように思えた。意識が遠退く刹那小銭を仕舞い終えた老女の両手が俺の左手を強く握り俺を覚醒せしめた（もつともいま居るこの鶴見が夢の世界なら「覚醒”はおかしいか？）。「あなた、ありがとうございます。このご恩は決して忘れません」と云っている。それと同時に俺は右手で財布を探り当てていた。『よかった、あった』とばかりそれを取り出すとそこからありったけの札を取り出して老女の手に握

らせる。「まあ、何を：？！」と辞退する老女に「いいんです。いいんです。これは賤別です」と云って強引に渡し、同時に（ふるさと行き）切符も握らせた。

これが夢世界（意識界）の不思議なところで合間にあるべき（切符を買うとかいう）行為や場面など余計なところはすつ飛び、肝心なところだけが現出するのだ。同じ理屈で次の瞬間には改札を抜けてホームへと上ろうとする老女が目撃された（まるでストップモーションだ）。エスカレーターの手前でこちらにふり向き、両手を合わせて深くお辞儀をしている。いやいやとばかり右手をふってお辞儀を返す俺の目にしかしさらなる摩訶不思議が目撃された。俺に合掌している老女の姿がなんと突然イブに変身しているのだ！何メートルも離れたそのイブの身体からはさきほどの体臭どころか、えも云われぬ芳香が漂ってくる。身は全裸ではなくあの紡ぎ機で織ったとおぼしき銀色の服をまとっている。「王様、立派になりました」凜とした声でそう伝えると両手を口元に持っていき、そしてそれを、両手を大きく広げて胸腔いっぱい溜めた息を俺に吹きかけてよこした。その瞬間この身が感電したように震え、そしてあの目には見えぬがまとわりついて離れなかった強大な悪想念が雲散霧消し行くように

感じられた。イブは背を向けてエスカレーター上の人となつたが、その頭上にあるべき駅舎が消えてしまい、エスカレーターが無限に上に続いているように見えた。さらにはエスカレーターそのものさえも消えて、畢竟イブ昇天の景となつたのだつた。耳にあの「紡ぎ歌」が聞こえて来る。

♪…さあ紡ぎましょう、織りましょう。見事な糸を、織物を。コトトンコトトン、コトコトトン。そうしたらきつと、道行く人々がふり向いて、わたしの主人の立派さを、紡いだわたしの労苦を褒めるでしょう。ああ、嬉しい！…それをよすがに、さあ、今日も紡ぎましょう、織りましょう。コトトンコトトン、コトコトトン…♪

【イブ昇天のイメージ from photo ac】



(六) 天国と地獄のサスペンス

(※この六章の題名は1963年に公開された黒澤明監督の映画「天国と地獄」から引いたものです。特急こだまを舞台とした息もつかせぬサスペンスを見習つて、そのようなタッチを期しての命題です。前章「桃畑」とは打つて変わった現実世界におけるスリルとサスペンスをお楽しみください)

【天国と地獄のサスペンスのイメージ by Anatolii Fomenko, from pinterest ↓】



「コトトンコトトン、コトコトトン…さあ、今日も紡ぎましょう、織りましょう…コトトンコトトン、コトコトトン…」気がつけば俺はソファベッドの上でイブの紡ぎ歌を口ずさんでいた。閉めたカーテンの隙間からは朝の光がさし込んでいた。その光に新生の、蘇生の息吹を感じながら俺は大きく伸びをした。「ああ、夢か。イブも獣人も…あの鶴見の街も」新鮮な、心からの驚きを感じながら俺はしばらくその余韻に沈んだ。俺は見た夢を覚えているという特技（かな？）があつて夢の揭示に思いを致すのが習わしになっていたのだが、この夢ばかりは強烈だった。夢は肉体に縛られた人間への揭示であり、鈍感な人間に何某かの方途を差し示すものである。「イブはジャスト喜びで、獣人は警告で、紡ぎ歌は…道だ。そうだ。そうだ、そうだ！これからの方途だ！」バカのように独り言を云いながら俺は勢いよくベッドから跳ね起きた。開示された道に「ふふふ」と笑みさえ漏らしながら台所の洗面台へと向かう。台所のテーブルにはすっかり溶けたオンザロックがグラス半分ほどになって置いてある。「ちえっ」と口の辺りを手でさすりながら洗面台に立つ。ミラーキャビネットに写つた俺の顔には涙の跡があった。「ハハア、なるほどね」覚えた感動の如何ばかりかを

悟りながらも、俺はその涙の跡を消すべく勢いよく顔を洗い出した…。

新生への糧のごときインスタントコーヒーとトーストをしつらえると仕事机のパソコンの脇に置き、昨夜ハンガーラックに引つ掛けたままの背広から手帳とバー・アンバーの領収証を持つてくる。領収証の裏には愛しいミキの走り書きがそのままだ。あの会計の折りの興奮が蘇つたがそれを程よい刺激に変えて俺は机に向かい、「さてと」とばかり実名を邵迺瑩（シヨウ・ダイエイ）という、ミキへの身体の提供者の詮索を始めた。改めて手帳の当該箇所を目を落とすと自分の字ながらとても読みにくい。あの状況での走り書きなので無理もないがしかしそれだったら手帳などに筆記せずに、携帯カメラでカシヤリとばかり写せばよかっただけの話ではないかとは後から思い至つたことである。あの時は切迫していてそう気づきさえしなかつたのだ。舌打ちし苦笑しながら「なにになに？勤め先は××新聞社で住所は千代田区内幸町…？」と独り言ちてから改めて関心を抱く。すれば彼女は俺と同じ新聞記者ということになるな、へえ、しかし業界新聞の俺とは格が違い過ぎだ。恐らくはミキこと××××××××××さん同様の才媛なのだろうな、とも思う。しかしそれにして

もこの中国名は：？とか、いろいろ腑に落ちない。私立探偵に依頼すれば簡単に素性を洗えるのだから俺にはそんな金はない。（手帳を見ながら）彼女の携帯番号はこの通りわかっているし：とあごのあたりをさすりながらしばし画策する。結局フィジカルで行くしかないなど検討をつけてからやおらトーストを食べ始め、それをコーヒードで胃に流し込んだ。いつまでも邵廻盤検索にかまけてはおれない。インタビュー記事を仕上げなければならぬ。俺は気を入れ換えると俺が契約している介護新聞社に出す記事を仕上げるべく、小気味よくパソコンのキーボードをたたき出した：

予想される介護報酬額、それに反発するだろう各福祉社団法人の在り様、果てはそれに群がる、利権の固まりたる県議や市議の在り様までみんな頭の中に入っていた。まったく、特養などの福祉社団法人がまるごと売り買いされ、金もうけの具とされるようなふざけた世の中だ。かつて一、二年ほど介護ヘルパーとして現場で働いた経験を持つ俺であれば、そこで働くヘルパーたちの苦勞はよくよくわかっている。それを一切解さず、おのれの欲だけを追求するような福祉社団法人の各経営者たち、また自治体役員やら県議・市議どもへの怒りをバネにして一気に記事を仕上げて行く。

いまから16年ほど前、俺は静岡にあつたとある老人ホームでヘルパーをした経験がある。その前のバブル崩壊以来経済がすっかり失調しまともな就職など思いも及ばなくなっていた。優雅に（だったかな？それなりに人間とは何ぞや？人生とは？などと、俺なりに真摯な追求の末のことだったのだが）2年間にも及ぶ海外放浪旅を終えて帰国してみれば国はバブル崩壊して居、致し方なくトラック運転手やらフォークリフト運転手やら種々雑多な業務請負の仕事を転々としていたのである。その一環として俺はヘルパーに就いたのだ。なぜ静岡かと云うとそこが泊まり込みOKの老人ホームだったからだ。その頃根城にしていた横浜・鶴見の安アパートが至って柄の悪いところで（アパート丸々一棟が土建会社の寮のようになっていて、俺を除く他の店子たちは殆ど土木作業員だった）、そこに居たチンピラ風の作業員たちに因縁をつけられ、集団で睡眠妨害を被るような、実に惨めな仕儀になっていたのだ。眠れなければ仕事が出来ず致し方なく住み込みOKな介護職に就いたのだが、まさかそれが今に至る介護系のフリージャーナリストへ続く道とは思ひもしなかった。とんだ怪我の功名（？：になるのかな？）だったがとにかく、その静岡の老人ホームに居

たヘルパーたちは誰も皆まじめで、肅々と「汚れ」仕事を熟していた。分けてもある一女性ヘルパーの姿が忘れられない。彼女は実にまめまめしく働き、他のヘルパーたちを教え指導し、その職場になくてはならない存在だったのだが、逆にそれゆえのことだろうか男性の施設長から度々叱責を受けていた。実務など何も知らず顧みない施設長であるのにも拘らず、彼女の仕事ぶりが悪い、他のヘルパーへの指導が足りないとか云ってよく叱責していたのだ。ヘルパーの出入りが激しいのも彼女のせいだとか云う（事実は3K職場に堪えられず止めて行く者が多かっただけの話だ）。そうしておけば他のヘルパーたちへの見せしめとなり訓戒にもなつて都合がよかったのだろうが、しかし叱責される折りのその彼女のくやしそうな表情（かお）が今でも忘れられない。すべてに堪えて働き続けなければならぬ自分の家庭の事情がある：とその顔は語っていた。またそれとは別にパートで来ていた別の女性ヘルパーで南島さんという名の女性などは、こちらは自身で美容院を経営している身だった。その商売柄か実にセンスのいい髪形をし、綺麗な人なのだが（こう云っちゃ悪いが）静岡県の方という場所柄のせい美容院の収入だけでは暮らして行けなかったようで週

何日かのパートで働きに来ていたのだった。その南島さんがこちらはこちらで施設長にはなくある傲慢な入居者に腹を立てていた。生活保護で入居していた、ある男性の入居者で、そのおかげで人（ヘルパー）に傳かれて暮らしているのにも拘らず、我々ヘルパーに対して実に傲慢な態度を取るのだった。曰く「小水の取り方が悪い」「俺への御教の料理具合はこうだと云つたろ?!」とかホントによく云えるものだと思つたものだ。まだ40前くらいの男性入居者なのだが筋ジストロフィーでもあったものか下半身がまったく動かず、自分の運命を呪っているような塩梅だったのだ。しかしそれであるにせよその気難しさ加減に比類はなかった。ある時など度が超えていたようで別棟にいる彼へのケアを終えて帰って来た南島さんが顔を赤らめながら「ねえ、田村さん、どう思う？あの人、生活保護でここに来ていんだよ。それなのによくああいう態度が取れるもんだねえ」と激している。俺は「ホントですよねえ」とか云って宥めながらその宥め半分に「それにしても南島さん、あなた美容院で儲け、こどもも働いて：お金が溜つてしようがないでしょう」と話を振ると「冗談云っちゃいけないよ。あんた。儲かっているんだって何人も人の股座の世話をするような

仕事しちやいなよ」と根明に反論していたが蓋し事実だったのだろう。彼女は在日の方かあるいは韓国から日本人男性に嫁ぐかした人で、韓国人女性らしく実に気丈で且つ「炎の女」という風情の、実に好感のもてる女性だった。その会話の折りに「田村さん、あんたあの××（件の入居者）さん程じゃないけどいつもどこか気難し気で、ちよっととつき憎いところがあるのよ。それ、改めた方がいいわよ」と指摘されたのはここでは余計なことだが、しかしなるほど例のバー・アンバーでミキから「アナタ、ピッタリノオンナノヒト、イナイデシヨ？サビシイツテ、メガイッテルヨ」と云われたことに類する指摘だったなあ：とは今になって思い当たったことではある。どうも俺には「影」があるらしい。まあとにかく、俺がここで何を云いたいかというと、このような施設で働くヘルパーたちには雇用主との関係や3K業務遂行の上において、身心に渡る過大な負担があるということなのだ。そしてそれには各自が持つそれぞれの切実なる家庭事情や金銭状態も加味してくるのである。それにも拘らず、このようなヘルパーたちに充当すべき人件費さえも食いものにしてしてしまう悪い施設長や理事長たちが、またそのポストに天下ろうとする公務員や地方議員ど

もが俺は許せなかったし、況やこのような社会福祉法人の私物化を見て取った暴力団組織が、表向きダミーの医師を理事長に仕立てて社会福祉法人を「買う」あるいは「転売する」などという行為に至っては言語道断だった。このような社会福祉法人の売買や、また常に国から支給される介護報酬や補助金などで確実に儲かることこの上ない（？）理事長や施設長のポストを、数億円で取引しているという実態とか、あるいは「息子に継がせる」として同族経営する、挙句（なんと）世襲化するなどという実態もあるそう。特養とかは公器である。これを私物化し世襲化するとはいったいどういうことか？！さらに事ここに止まらず、実はこのような税金や社会保険を原資にして「財産を貯める・私物化する」というのは単にこの介護業界だけのことではない。医療界の医療保険でも、あるいは1950年代に成立した精神衛生法による措置入院制度で、しこたま儲けた精神科病院の経営者や病院長らにも云えるし、さらにまた同じ1950年代に制定された特殊学級振興策を利用して特殊学級に勤めていた教師や関係者らが、社会福祉法人を起こして障害者施設をつくり、自らが施設長や理事長に収まるなどなど、実に多岐にわたると介護ネットサポートで書かれている。

考えてもみて欲しい。これらはすべて我々が自分の老後や生活の為に延々と払い続けた介護保険料や健康保険料、そして税金を利用しての悪事、私物化なのである。このような連中が我々がいつか老人ホーム、あるいは障害者施設に入居して、そこで享受すべき永続的な安心や居やすさを追求し保障する分けがないではないか。昨今の老人ホームや障害者施設におけるイジメや虐待の背景にはこのような素地があることを俺は皆さんに知って欲しいのだ。人というものは他人に迷惑をかけずに「安心して死んで行ける」環境が保障されているなら、今を、この天から享受された人生を精一杯生き切ることができる。頑張れる。本来そのようなことの為の介護保険や社会保険制度ではなかったのか？であるのにも拘らず、その人としての最後の抛りどころさえも奪う、私物化してしまう…このような私利私欲の権化どもを糾弾することが、介護ジャーナリストの使命のひとつと俺はそう心得ているのだ。ところでこれらはすべて政治家や当該役人らを利権（賄賂や天下り）を餌にして、これとコネを結んでする悪事だが、この観点からすれば例の高橋まつりさん過労（イジメ！）自殺事件で、また先のオリンピック広告独占で悪評を買った電通など、民間企業にもこれは云える

ことだ。政界始め各界に、そこに縁故のある自社の社員を出向せしめ、また大手メディアの主要な広告枠を予め買い占めて、広告業界寡占状態をつくり出した電通の在り様（これこそコネとカネの権化！）とその弊害はつとに指摘されるべきだし、またミキへの約束で、必ずやると誓ったこと（ミキを地獄から救い出す！）…そこに至るべき方途のひとつとして、××電力が持つ電通同様の、経産省資源エネルギー庁を始めとする政府との強力なコネの威力、また総括原価方式という電気事業法で保証された、まるで打ち出の小槌のように使えるカネの威力、これらを以って××電力は大大独占企業を現出せしめた分けだが、この巨竜への詮索と糾弾をすることが肝要であると俺は心得ていた。そもそもこの巨竜誕生のその元を辿れば介護保険同様に、すべては我々消費者からの支払い（及び経産省からの補助金や原子力国債等）だし、その巨竜の独占からくるシワ寄せも電気料金値上げとしてまた税額アップとして我々に戻ってくるのである。そして何より、俺が我慢ならないのは、先のヘルパーをないがしろにすること同様に、これら大企業が図りさえすれば、そこで働く一社員の命運など、その社員が抱いていただろう自社への思い入れ、愛社精神などを散々に踏みにじつ



て憚らないということだ。かの××〇〇殺人事件における総合職だったその被害者が、自説を曲げなかったが為に社内で孤立化を強いられ、それ以前には女性の尊厳を冒す何某かのことをされ(?)し剩え嘲笑されて、その傷を癒さんがために街角に立ったことは容易に想像されることだ。彼女は女性としてのまた人間としてのリカバーを図りたかつたのだろう…。

パソコンを打ちながらもこのようなことを追想するうちに降って湧いたようにバー・アンバーでのミキの言葉がよみがえった。「そう!そう!そうなの!田村さん:わたしは本当に寂しいのよ!そして怖いのよ!廻りは真っ暗っ!:何もありませんし、何も見えない。怖くって、寂しくって、悲しくって:」もしそのミキこと被害者が、現世のみならず死後においても苦しんでいるのだしたら、利用され辱められているのだとしたら:…俺は思わず机の上をこぶしで叩いてしまった。カップのコーヒーが飛び散る。ちつとばかり舌打ちをして台所からダスターをもって来コーヒーを拭き取る。さても取り止めのない思索をしながらでも記事はつつがなく仕上がった。いま一度目を通してからそれをファックスで会社に送る。気が付けば時刻は10時ちよつと前だ。俺はデスクの山口にそちらに

赴く旨の一報を入れたが正確な時間は告げずに夕方頃とだけ云っておく。退勤後の山口と一杯やろうと慮つてのことだがしかしそれなら時刻が早すぎる。実は神田佐久間町にある会社に行く前に寄りたところが一軒あるのだ。つまり邵廻瑩である。彼女が勤める××新聞・東京支社は都営三田線の内幸町駅近くだ。

今から行けば内幸町へはちようど12時頃に着くはず:一応算段があつたのだ。トイレやら何やらを済ませてすばやく身支度を整えると俺は出かけるべくドアのノブに手を掛けた。しかしここで戦慄を覚えた。(夢だったか) 昨晚のイブの訪問やら、こちらは実際に開けた突然の霊視のことが思い出されたのだ。「まったく:勘弁してくれよな」とおまじないのようにつぶやいたあとで俺はドアを開け階段を降りて行つた。そこらに変なものも立っていないかキョロキョロ見まわすが何も見当たらない。ゆうべ見かけた事故のあつた交差点にいた地縛霊(?)も出ずじまいだし、いずみ中央駅から乗った相鉄線の電車内でもJRでも最後の地下鉄内でもついに何も出没しなかった。「よかつた!つ」心中で快哉する。どうやら霊視能力は失せたらしい。こんなものがこれからもずっと続くなら俺はノイローゼになりかねないだろう。とにかく「よかつた!」

のだが、ただ「いまここに居ながら同時に違う場所にも居る」というあの変な感覚だけはずっと続いていた。そのゆえはわからない…。さて、地下鉄内幸町駅から5分も歩かないうちに邵廻瑩が勤めるXX新聞社前に着いた。眼の前には屋上がアーチ型になっている日本プレスセンタービルの瀟洒な威容が聳えている。ここは日本の報道界の中核と称され、「諸外国の賓客や国内の重要人物を迎えての記者会見を主要な任務とする日本記者クラブ、新聞界の共同団体である日本新聞協会、外国の報道機関に取材の便宜を提供するフォーリン・プレスセンター、そして、新聞・報道各社の支社局や取材拠点などを収容している」と紹介されている。なるほどそう云えばビル前の路上にはセンチュリイが停まっている。俺などには松田優作主演の「探偵物語」の主人公がドテラ姿で一流商社ビル内に現れたようなものだ。身が怖気づく。

(…続く)



【邵廻瑩(シヨウ・ダイエイ)のイメージ pinterest】